

36 戦争をなくすためにできること

はじめに父の地元新聞への投書から。「私は昭和26年4月、長崎市油木町にあった市立長崎商業高に入学した。校舎は古い鉄筋3階建てだった。先生から長崎原爆の話を聞いた記憶はない。時は流れ、昭和47年から10年間、教師として母校に勤務した。生徒たちに長崎原爆の話をしたことはなかった。今思えば、恥ずかしく情けないことだ。(中略)今、痛切に思うことは、教師は地元で起こった、戦争犠牲など生命に関わることはしっかり伝えるべきだと」父は89歳になるまでの20年間、修学旅行生や県外の人に被爆実相を伝える平和案内人を務めた。その父が「知覧特攻平和会館」に行きたいということで先日兄と三人で遠出した。帰りには父が若い頃に担任をした82歳の教え子に会いに行った。知覧で見たものを話題にすると、自分も孫と行ったが、残された写真はどれも特攻前の勇ましい顔ばかりなのに、「悲しそうな顔をしてる」と孫がふとつぶやいたとのこと。その話が知覧で見たばかりの手紙と重なりました。「あんまり緑が美しい 今日これから死に行くことすら忘れてしまひさうだ 眞青な空 ぽかんと浮かぶ白い雲 六月のチランは

もうセミの聲がして 夏を思はせる 『作戦命令を待って いる間に』 “小鳥の聲がたのしさう 俺もこんどは 小鳥になるよ” 日のあたる草の上に ねころんで 杉本がこんなことを 云ってゐる 笑はせるな 本日一三時三五分 いよいよ知ラン を離陸する なつかしの 祖国よ さらば 使いなれた 万年筆 を“かたみ”に 送ります」悲しいと直接言わないので、余計に悲しくなってしまう手紙です。悲しいと口に出せなかったに違いありません。「ロシアのウクライナ侵攻」も終わっていません。戦争が悲劇を生むのは誰もが分かっているのに、なぜ戦争はなくなるのでしょうか。

ポール・シムノン氏は少年期をジャマイカンのゲットーで過ごした。そのゲットーをタイトルにした「ブリクストンの銃」の中で、「誰かが玄関の戸を蹴り飛ばして お前んちへ押し入ろうとしてるぜ さあお前さんどうするんだい？ 頭の後ろに手を回して おとなしく出ていくつもりかい？ それとも拳銃の引き金に 手をかけるつもりかい？」と歌いました。また、バイレンス映画の巨匠と言われたサム・ペキンパー監督は「わらの犬」で大人しい天文数学者を主人公にして「どんな人間の中にも潜む暴力衝動」を描いて見せました。争うのが「人間の本能」だと考える人もいるでしょう。ヒトラーやプーチンのような指導者の資質のせいもあるでしょう。司馬遼太郎氏はロシアについて、「信用しないというのが外交上の国際的な常識であった」とまで書いています。もちろん、これは「日ソ不可侵条約」を結んでいたのに、1945年8月8日にソ連軍が満州になだれ込んできたことを踏まえた発言です。経済の問題や宗教の問題など戦争がなくなる理由は複雑で多岐に渡るのかも知れません。太平洋戦争ではマスコミがあおり立て、国民も戦争を望んだという一面があったことも否めません。父が書いたように戦争の実相を伝えること。戦争を起こさないための知性を学ばせること。両方が大切だと思います。有能な指導者(政治家)を見極め選ぶ必要があることと、政治レベルに行かないまでも日常レベルでも、「受け入れがたい他者とも何とかして折り合いをつけて共存していくこと」が、理性を生み危機を乗り越えるために必要だと教えないといけなと思います。「肩のこらない」という名の「校長室だより」でしたが、最後に「肩がこっても」書きたいことを少し書きました。それではさようなら。 令和7年3月3日 大村城南高等学校長 中小路尚也